土佐日記『門出』確認テスト　解答・解説

■ 解答・解説

問1 **イ（並列・同類）**。「男も…女も…」と同類のものを並べて示している。

問2 (1) 終止形「す」。サ行変格活用動詞で、意味は「する」。 (2) 助動詞「なり」の連体形。意味は**伝聞・推定**。 (3) 訳「するという／するそうだ」。（※終止形「す」に接続しているので伝聞推定の「なり」。「男もするという日記」の意。）

問3 **イ（意志）**。「（私も）してみよう」という作者（仮託した女性）の意志を表す。

問4 「（女である私も）してみよう」。

問5 (1) **断定**の助動詞「なり」。 (2) 伝聞推定の「なり」は**終止形（ラ変型は連体形）に接続**するのに対し、断定の「なり」は**連体形・体言に接続**する。①は終止形「す」＋「なる」なので伝聞推定、③はサ変連体形「する」＋「なり」なので断定と判別できる。

問6 **連体形**。下の断定の助動詞「なり」が連体形に接続するため、「する」はサ変連体形。

問7 **十二月二十一日**。（「二十日あまり一日」＝二十日に一日を加えた日。）

問8 **ウ（午後八時ごろ）**。

問9 （旅立ちのために）出発する。旅立つ。

問10 「（その旅立ちの）事情を、少しばかり紙に書きつける。」

問11 「男もするという日記というものを、女（である私）もしてみようと思って、する（書く）のである。」

問12 **紀貫之（きのつらゆき）**。

問13 **古今和歌集（古今集）**。紀貫之は『古今和歌集』の撰者の一人で、仮名序の作者としても知られる。

問14 **イ（平安時代）**。十世紀前半（九三五年ごろ）の成立とされる。

問15 土佐の**国司（国守）**として赴任しており、その任期を終えて京へ帰るところであった。

問16 **漢字（漢文）**。当時、男性の日記は漢文で書くのが普通だった。

問17 **仮名（かな）**。

問18 **女性**（女）に見立てて（仮託して）書いている。

問19 （例）「仮名で書くため女性のふりをした。」（当時かな文字は主に女性が用いるものであり、かなで自由に書くために女性に仮託したと考えられる。）

問20 （例）漢文ではなく**仮名**で書かれた、日本で最初の本格的な**仮名日記文学**である点。後の女流日記文

学の先がけとなった。

問21 イ（蜻蛉日記）。（ア『古事記』・ウ『万葉集』は奈良時代、エ『徒然草』は鎌倉時代末の随筆。）

問22 イ（作者が仮託した女性）。作者は女性のふりをして、その視点から語っている。